

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### 共有の工夫～カイコ～／よいこのもり幼保連携型認定こども園（宮崎県）

子どもたちが生き物と関わる時、または飼育する時には、どのような姿に注目しますか？

よく観る姿、飼うための環境や餌のことを考える姿、命の誕生や死と向き合う姿…。さらに、気付きや発見を友達と共有していく姿、それぞれの姿から、「科学する心の育ち」を読み取ることが期待できます。

今回は、生き物を飼う子どもたちの気付きや発見、表現などをみんなで共有する一つの方法として、掲示を工夫した園の事例をご紹介します。



### ● カイコ／5歳児

#### ✦ 飼育スタート

子ども：「白い幼虫だ」

子ども：「何を食べるの？」

子ども：「大きくなったら何になるのかな？図鑑で調べてみよう」

早速、図鑑や絵本で友達と調べる子どもたち…。

子ども：「白いガになるんだ」

子ども：「このまん丸は何？」と、カイコガの隣りに載ってるマユに気付く。

子ども：「すごい！こんなのだうやって作るんだろう？」

子ども：「餌は、クワの葉っぱを食べるって」（※今回の飼育では、人工餌を使用する）

- 保育者は、「卵から成虫になるまでのカイコの一生」が分かる図を掲示。カイコに関連する本や図鑑を、飼育箱の横に置き、いつでも子どもたちが自分から調べたり、見たりすることができるようにした。
- 子どもと一緒に「カイコ新聞」を作ることになる。



#### ✦ 幼虫の脱皮

子ども：「みんなが一斉に上を向いてる動かない」

子ども：「死んだの？」

子ども：「カイコの本に載ってるかな？」

- 子どもたちと一緒に保育者もカイコの絵本で調べる。

子ども：「眠ってるんだ」

子ども：「もうすぐ脱皮するよ」

子ども：「そういえば、カブトムシも脱皮したよね」



## ✦ カイコとキアゲハの比較

- 5歳児の保育室には、カイコの他に、「キアゲハ」や「ザリガニ」を飼育していたので、子どもたちは自然と比べたり、違いに気付いたりしていた。

子ども：「カイコ（幼虫）は背中に羽根みたいな模様があるね」

子ども：「キアゲハ（幼虫）の模様はしましまだ」

子ども：「アオムシは、敵を驚かすために背中に目玉模様がついてるんだよ」

保育者：「さすが、虫博士だね」

子ども：「カイコは白い蛾になるけど、キアゲハはきれいな模様の蝶になるんだね」

- 保育者は、子どもたちの気付きや発見を一つ一つ受け止めたり、みんなで共有できるような機会をつくったりする。



## ✦ 繭作りが始まった

子ども：「あっ カイコが口から糸を出してる！」

子ども：「すごい、早くカイコのお家に入れてあげよう」

- 保育者は、子どもたちと一緒に、マユを作るための「まぶし」を作った。また、作る様子がよく分かるように筒状にした透明フィルムを用意した。

子ども：「カイコどうなってる!？」

子ども：「繭作れたかな? などと言い、みんなは朝、保育室に入ると、まず一番にカイコの飼育箱を覗きこんでいる。

子ども：「できてるよ! カイコってすごい」と、歓声があがる。

子ども：「カイコ頑張ったね」

子ども：「この中でサナギになるんだ」



## ✦ 繭を作れない幼虫

10匹の中で、1匹だけ繭を作らず動かなくなった。

子ども：「どうして1匹だけ繭を作らないのかな?」

子ども：「エサも食べないよ」

子ども：「全然動かないよ」

子ども：「1匹だけかわいそう」

子ども：「みんなが触りすぎたんだよ？」

保育者：「この幼虫、どうする？」と、気持ちに寄り添いながら尋ねる。

子ども：「お墓を作ってあげよう」



## ✿ 「カイコガ誕生」

子ども：「やっと逢えたね」

子ども：「カイコガの触角、大きいブラシみたい」

子ども：「オスがメスに近付いてきた」

子ども：「わー結婚してる」と、子どもたちは拍手して喜び合っていた。

そして、翌々日、卵を産んでいることを発見。

子ども：「どんどん卵を産むよ」

子ども：「図鑑に500個って書いてあった」

保育者：「この卵が産まれる頃は、みんなは小学生だね」



- 「羽化させる繭」と「乾燥させる繭」に分ける時は「全部羽化させたい」という思いがあったが、「糸をとってみたい」という興味もあり、話し合いの結果、2個の繭から糸を取るようになった。子どもたちは、長く繋がる銀の糸が「どこまで繋がるのか？」興味をもったり、糸の綺麗さに感激したりしていた。
- 保育者は、子どもたちの実践記録を日ごとに並べた「カイコ新聞」を全て保育室に掲示し、みんなで振り返り、共有できる環境を作った。送迎時には、保護者に子どもが得意気なその時の様子や、場面を話していた。そして、保護者からの連絡帳には、子どもたちの家庭での様子「カイコへの思い」などの記載が多くあった。

## ✿ 振り返って

「カイコ」を飼育して「幼虫→繭作り→蛹→羽化→交尾→産卵」と、36日間という短い間で驚くような完全変態や、小さな幼虫が糸を吐き、美しい繭を作る神秘的な様子を観察することができた。今までの飼育にはない大きな特徴として、繭から糸を取るという体験があった。「羽化させる繭」と「乾燥させる繭」に分ける時は「全部羽化させたい」という思いと、「糸をとったら死んでしまう」「糸を見て見たい」という興味の間で揺れ、「命」を考える機会となった。

また、飼育過程で死んでしまった幼虫や、卵を産み終え餌も食わずに死んでいく最後を見たのも、小さな生き物の「命」を感じた瞬間だった。自然科学の遊びの中で、「生き物に触れる」活動は、子どもにとってとても興味があるものと感じた。子どもたちは、成長するにつれて、体験を積み重ねるごとに、自然への関わり方は深まり、思考力、探究心が高まる。自分の目で見て触れての「本物を知る体験」が、感性を豊かにし「科学する心を育てる」ことに繋がっていると思われる。